

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

作品の周辺情報と価値評価について：
いわゆる「佐村河内事件」を例に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 麻子, Fukuda, Asako メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1450

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



作品の周辺情報と価値評価について

—いわゆる「佐村河内事件」を例に—

福田 麻子（器楽）

はじめに

本研究は「作品」と「作品の周辺情報」との関係をどのように捉えるべきかについて、いわゆる「佐村河内事件」¹（2013 年 10 月～2014 年 2 月）の前後に出版された当該作品《交響曲第 1 番〈HIROSHIMA〉》に対する論評を比較することで、それぞれの論評が「作品」と「そうでないもの」の境界をどこに置いているかを示し、これにより「作品とはなにか」という大きなテーマにアプローチすることを目的とした試みである。この事件が衆目を集めたのは、事件発覚以前の CD の売り上げ等を含む作品の評価の高さが異様だったことにも起因する。事件後その詐欺的な事件の態様が大きく取り上げられたことにより、その社会的な価値評価は目に見えて変化していった。このように、一つの「作品」に対する評価の変化が顕著にみられた本件の例は、我々が「作品」を評価する場合になにをもって「評価の対象としての作品」とするのかを考えるにあたって多くのことを示しているように思われる。「芸術作品」の価値評価が風評やゴシップによって大きく左右されるときに人が見ているのは「作品」なのか、そういった「周辺情報」とは無関係に存在する「作品」はあるのだろうか、現実的に「作品」を評価する際に我々はその音楽作品の「周辺情報」に対してどのような態度をとっているのかを考察し、「作品とはなにか」という問いに「周辺情

¹ 佐村河内守氏は、ゲーム音楽の作曲家として頭角を現したが、1999 年ごろに聴力をほぼ完全に失ったとし、「全聾の天才作曲家」として 2010 年夏、演奏時間 80 分の長大な《交響曲第 1 番〈HIROSHIMA〉》が全曲初演され、2011 年夏には CD も発売。知名度は徐々に上がり、2013 年春には「NHK スペシャル」で大きく取り上げられた。しかし 2014 年 2 月 6 日、作曲家の新垣隆氏が記者会見を開き、「自分がほぼすべての曲を代作した」と告白し、その際、佐村河内氏の詳細な「発注書」なども公表した。佐村河内氏は代作を依頼した事実を認め、全聾でもなかったことが、社会に大きな衝撃を与えた一連の事件である。「ゴーストライター事件」とも言われる。

報」という観点から答えてみたいと思う。その上で、クラシック音楽を世の中にいかに浸透させていくべきかという現代ならではの問題を抱えるひとりの演奏家としての筆者自身の立場から、言い換えれば、音楽作品を提示する側の一員として、音楽作品の聞き手の「正しい」鑑賞に資する「周辺情報」について考察を加えてみたい。

I 作品の評価と周辺情報の関係についての対立する考え方

ここで「作品」と「周辺情報」との関係の捉え方として【モデル①】と【モデル②】という2つの対立する考え方のモデルを示したい。現実には単純にどちらかのモデルに属する考え方というようなものは存在せず、多くの論者は傾向としてどちらかのモデルに軸足を置いた考え方をするのだが、ここでは考えを整理するためにこのような分け方をする。

【モデル①】 作品の評価にある程度の周辺情報を含める考え

⇒ 周辺情報は作品の一部である。

〈傾向〉評価の対象としての「作品」の範囲は広がる。

【モデル②】 周辺情報を排除して作品を評価すべきとする考え

⇒ 十分に客観的な作品が存在する。

〈傾向〉評価の対象としての「作品」の範囲は狭くなる。

【モデル①】の考え方は、作品を評価する際に一般に広く世の中で見られるようにいろいろな情報込みで「作品」を捉える態度であり、一言でいえば「作品の評価に周辺情報を含める考え方」である。周辺情報の質や量については流動的で作品を評価する主体の主観によるところが大きい。いわゆる「佐村河内事件」においては、「障害を乗り越えた現代のベートーベン」といったストーリーや、《HIROSHIMA》という作品名が「周辺情報」にあたり、事件発覚後には「虚偽であった」という情報が「周辺情報」として評価の対象としての「作品」に含まれることになる。周辺情報を作品の一部とすることで、このモデルの考え方は「作品」の範囲を広く捉える傾向があると言ってよいと思う。

一方、【モデル②】の考え方は、できるだけ厳密に周辺情報を排除して作品を評価すべきとする考え方であり、「佐村河内事件」の発覚後に多く見られた「音楽そのもの」を評価す

べきであったとの批判等の例に見られる考え方である。「本来の作品」とか「作品の本質」とか「作品そのもの」という表現が示すように、この考え方の根底には「十分に客観的と言えるような「作品」」の存在が信じられているように思われる。その結果、評価の対象としての「作品」と言うものの範囲は狭くなる傾向にある。

Ⅱ 「佐村河内事件」の前後における作品評価の具体例

I章で示した2つのモデルの考え方をもとに、本作品に対する具体的な作品評価について見ていくことにする。一般的には、その事件性に主眼が置かれ、作品の評価と呼べないネット上の記事が数多くあるため、ここでは新聞記事や書籍、音楽家のブログなど楽曲の評価を専門的な視点から述べられているものを取りあげることによって、専門家と呼ばれる人々が「周辺情報」をどのように捉えて本作品を評価しているのかを見てみたい。

Ⅱ－1 事件前の評価の例

2009年7月、作曲家の三枝成彰氏は芥川作曲賞の選考委員として本作品を聴き、その感想の中で、「…完全に聴覚を失ってしまった。そんな苦境にあっても、彼は音楽への情熱を失わず、幼いころからの鋭い感受性と天性のセンスをもとに、ほとぼしる思いを胸に秘めて独学で勉強を続け、曲を書き続けた。」と述べている。初めて曲を聴いた際にはこのような予備知識はなかったと前置きをしながら、「大きな衝撃を受けた。まずは曲のすばらしさに驚き、その後、彼のプロフィールを知ってさらに驚いた」と絶賛している(三枝 2009)。「純粹にいい曲だから惹かれた」という氏の言葉には「佐村河内氏のプロフィール」という「周辺情報」は作品そのものの評価とは関わり合いのないものであるという態度が読み取れるが、実際にはこの文章を読んだ人々がこの「物語」を「周辺情報」として心に浮かべつつこの曲を評価することを念頭においていないとは考えにくい。よって、この記事においては、三枝氏は【モデル②】の考え方に基づき作品を評価していると述べつつ、一方で作品評価の在り方として【モデル①】の考え方を認めていると言える。

2010年1月、作曲家の吉松隆氏は本作品について「延々と圧倒的な音響の洪水が続く大曲だが、すべての聴き手を巻き込む魅力に富むと同時に見事に設計された傑作だと確信する。」と自身のブログに述べている。興味深いのは、この文章は当時広島で行われた初演のコンサートを映像で見ての感想なのだが、佐村河内氏をとりまく「物語」については一切

言及がない。その音楽のタイプを「後期ロマン派から近代あたりまでのハイブリッド」であると評し、「日本人が書いた最高の交響曲のひとつ」と絶賛している。先に述べた三枝氏とは対照的に【モデル②】の考え方にに基づき、「周辺情報」を排除して評価を行っているように見える。(吉松 2010)

II-2 事件後の評価の例

さて、一連の事件が発覚した後、2014年2月読売新聞において、作曲家の細川俊夫氏は自身が広島出身で過去に原爆の惨禍を題材にしたオーケストラ作品を書いたことをとりあげ、「自戒をこめて」、「何かしらの表題を持つ曲は、いとも簡単に音楽とは別の『ムード』に支配されてしまうことがある。だからこそ、『音』そのものに純粹に耳を傾ける姿勢が重要」と述べている。この文章の中で細川氏は音楽作品の「表題」を「周辺情報」と捉え、現実的に【モデル①】の考え方の存在を認めつつ、できるだけそれを排除すべきとして【モデル②】の考え方に立つべきであると主張している。(細川 2014)

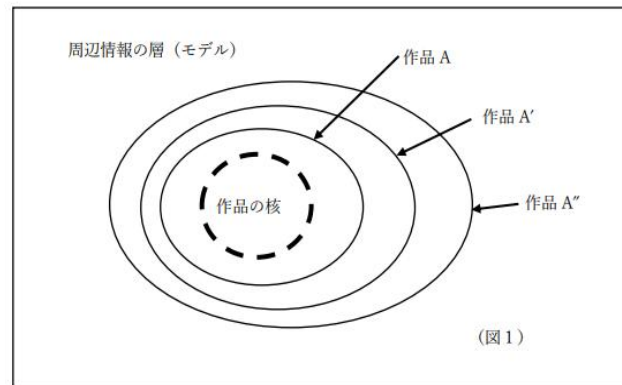
さらに上記と同じ新聞の特集記事において、音楽学者の岡田暁生氏は本作品について「傑作ではないけれど、悪くない曲」とした上で、「作者は耳の聞こえる別の作曲家だった。その事実が『曲そのもの』の価値をそれほどまでにおとしめるのだとしたら、私たちはそもそも『曲そのもの』を聴いていなかったことになる。」と聴き手の問題を提起し、本作品を「偽りの物語を排して虚心坦懐に聴かれるべき」としている。岡田氏は事件以前に美談とされた「物語」だけではなく「ゴーストライター事件」というものをも「周辺情報」とみなし、それらの「周辺情報」を排除して「作品そのもの」を評価すべきとして【モデル②】の考え方に立っている。(岡田 2014)

これまで見たように、ここに取り上げた専門家の多くは【モデル②】の考え方、つまり「周辺情報」をできるだけ排除して、「音楽そのもの」を評価すべきであるという考え方に重心を置く傾向が見られた。事件の前後の記事の内容を単純に比較することはできないが、事件後の論評には「周辺情報」を認めることに対する否定的な見解が強くなっているように見える。本件では「作品」に付随する重要な「周辺情報」に虚偽の情報が含まれていることが明らかになったことにより「周辺情報」そのものに対する萎縮効果が生まれたのではないだろうか。

III 作品を取り巻く周辺情報の層

Ⅱ章の例を通じて作品の評価と周辺情報の関係について図1のようなモデルが考えられるのではないだろうか。図はしばしば「音楽そのもの」と表現される「作品の核」のよ

うなものの周りに情報の種類や質によってその周辺情報の層が重なっている様子を示している。聞き手がどの程度の情報を評価に取り入れるかによって、評価の対象としての「作品」が作品A、作品Aダッシュユ…のように無限に存在するように考えられる。つまり、同じ「作品の核」を持っ



てはいるが厳密には「別の作品」といえるものが聞き手の態度によって体験されるのであって、そもそも「作品の核」と「作品の周辺情報」に明確な境界はなく、「音楽作品の周辺情報」は評価の対象としての「作品」に含まれるので、音楽を体験するその時間と場所で聞き手の持っている「周辺情報」の違いがそのまま聞き手がその時に体験する「作品」の違いになると言える。

前章で示した批評の例とは異なり、作品そのものの評価ではないが、2014年5月、音楽学者の渡辺裕氏は本事件に関する論評において、「作品の内には、様々な人々の多様な想像力のもたらした豊かな広がりを含んだイメージが、いわば集合的記憶として蓄積されてくる。われわれの音楽体験は、まさにそのような広がりを体験することと表裏一体になっているのであり、そこから『音楽そのもの』だけを切り出すなどということはそもそもできない相談である」(渡辺 2014)と述べている。この考え方は「周辺情報」を排除すべきという【モデル②】の考え方は「作品の周辺情報や物語」こそが音楽体験の広がりや奥行きを増すという現実から目を背けて「音楽作品」を狭くとらえてしまう危険性を示しているように思われる。

おわりに

前章で結論付けたとおり、音楽作品は「作品」の（異なる周辺情報を持つ）聞き手の数だけ存在すると言える。このことから「周辺情報」をどの程度「作品」に含めるのかが聞き手の問題であることは間違いない。しかし、「佐村河内事件」のように積極的に虚偽の

「物語」を聞き手に与えることで、つまり「周辺情報」をミスリードして感動的な音楽体験を導くというやり方がある以上、やはり、「周辺情報」に対する責任の一端が作曲家・演奏家に代表される音楽作品を提示する側にもあると考えるべきだろうと思われる。「周辺情報」が「作品」に含まれることが前提であるのならば、よりよい「周辺情報」を含む「作品」を提示することが音楽作品を提示する側に求められるのは当然のことであろう。

現代はクラシック音楽にとって幸運な時代であるとは言い難い。演奏家の提示する音楽が、クラシック音楽の知識や経験に基づいて適切に受容する聞き手に恵まれることはまれで、多くの場合音楽は消費されている。そのような現代の文脈の中では、クラシック音楽を提示する側に立つ者がどの程度聞き手の持つ作品の「周辺情報」に関わるかは大きな問題であると思われる。クラシックの演奏家は演奏会の場において（時にはレクチャー・コンサートのような場において）、具体的にはプログラムノートや演奏の合間の曲紹介や解説やおしゃべりを通じて、芸術的な広がりや奥行きを与えるような情報や物語をその聞き手に対し積極的に提示していくことが必要であろう。同時に不実な虚偽の情報を可能な限り排除して、その音楽体験を最善の「作品」に近づけることが以前にもまして必要であろうと思われる。確かに、音楽体験の一部となる「周辺情報」を、まさに「作品」の一部として演奏家個人の意図をもって聞き手に与えることは、ときには聞き手の鑑賞の自由を奪いかねない。しかし、現代の演奏家は、「周辺情報を聞き手に提示すること」が構造的に有するこの危うさを自覚した上で、「周辺情報」の内容を十分に吟味し、自らの信じる音楽の価値を聞き手に対して誠実に、積極的に提示していく姿勢が求められるように思われる。

参考文献

インターネット

三枝 成彰

2009 「勇気をもたらった『交響曲第一番』」（『三枝成彰のイチ押し！』2009年7月12日） <http://shigeakisaegusa.cocolog-nifty.com/blog/2009/07/post-d40e.html>

吉松 隆

2010 「交響曲第一番ふたたび」（『隠響堂日記』2010年1月14日）

<http://yoshim.cocolog-nifty.com/tapio/2010/01/post-b821.html>

雑誌・新聞記事

岡田 暁生

2014 [論点スペシャル] 佐村河内氏問題 『読売新聞』2014年2月19日朝刊, 13.

細川 俊夫

2014 [論点スペシャル] 佐村河内氏問題 『読売新聞』2014年2月19日朝刊, 13.

渡辺 裕

2014 『芸術作品』をめぐる虚実皮膜の間 『アステイオン』80号, 245.